営農だより 2022年5月号

ＪＡいがふるさと

今後の栽培管理につきましては、各営農経済センターの出向く営農担当・営農指導員が窓口相談と現地巡回指導を行いますので、お気軽にお尋ねください。

水稲の栽培管理

●田植後の注意点

1.田植後～中干し時期の水管理

活着期（田植～7日後）5～6cmやや深水
分げつ期（活着後～中干し前）2～3cmの浅水

田植後しばらくは強風や低温から守るためにやや深水に、活着後は、分げつの発生を促すとともに、土壌の酸素不足を防止するため、浅水としましょう。

中 干 し：1株18本～24本程度（コシヒカリ）の茎数が確保できたら中干しに入ります。分げつ過剰のほ場が見られるので、田植後何日という時期ではなく、生育状況に応じた水管理が必要です。土壌表面が乾いて軽い亀裂が入れば中干しは終了となります。

間断潅水：中干し後、収穫直前まで、浅水→落水→浅水（飽水管理）を繰り返しましょう。

※飽水管理とは浅水から急激に落水するのではなく自然に落水するのを待ち、自然に落水できたらまた浅水にする管理方法です。

2.除草剤（中期･後期）使用時の注意点

・使用基準を守り、適期に散布して下さい。
・使用する剤により使用時期が異なるので、ラベルをよく読みましょう。
　※高温時に薬害が起こりやすいものもございますので、使用時期を必ず確認しましょう。
1）中期剤の散布時にも、田面の露出が無いように、深さ5cm以上に水を張り、3日程度は水の動きを止める。
　ただし、バサグラン粒剤は、落水後に利用する。
2）後期（2・4-D粒剤）は、使用時期を特に注意して下さい。

3.病害虫防除

使用基準（量、時期等）を厳守すること、またラベルをよく読み適正な使用をしましょう。

・葉 い も ち：箱粒剤をすることによって予防効果は高いが、多発の場合は追加防除が必要な場合もあります。
　箱施用していない場合は本田防除が必要。（オリゼメート粒・オリブライト粒）
・ごま葉枯病：「みえのゆめ(みえのゆめBSL含む)」で発生が懸念されるので、必ずオリブライト粒の散布を。
・害　　虫：イネミズゾウムシ、イネドロオイムシは、箱施用していない場合は本田防除が必要。
　（トレボン粒剤、なげこみトレボン）
　イネクロカメムシは、6月上旬より発生が予想されるので注意が必要。（スタークル粒剤）

4. 調整肥

稲体を健全にし、品質向上に効果があります。施肥時期は、出穂55日～45日前までです。
・珪酸加里：30～40kg／10a
・マルチサポート1号：20～40kg／10a
・粒状草木加里：20～30kg／10a

JAからのお知らせ（お願い）

○令和4年産米の出荷契約の内容確認について

ＪＡでは、現在令和4年産米の出荷契約申出数量の内容確認を行っており、この5月家庭訪問日に契約内容の確認通知を稲作農家の皆様へ送付させて頂きました。変更等ある方は下記日程までに連絡をお願いします。

最終の契約申込及び変更は、5月25日（水）ですので、変更等がございましたら、最寄りの営農経済センター・グリーンショップまでお願いします。

農薬を適正に使用して『農作物・生産者・環境』の三つの安全を守りましょう

安定的な生産のために農薬は必要な資材です、適切に使いましょう

防除対策の基本

■ 病害虫・雑草が発生しにくい環境をつくる
■ 発生状況を確認し、適切な資材を適期に使う
■ 適切な防除ができたか確認する

農薬使用の基本

■ 農薬ラベルを確認、使用方法を守る
■ 周辺への農薬飛散防止対策を実践する
■ 農薬の管理を徹底し、保護具を必ず着用する

農薬は、病害虫・雑草への効果だけでなく、農作物への薬害や残留、環境影響などについて安全性が確保できるよう使い方が決められています。
安全に使うために地域での連携を大切にしましょう。

基本を守って、農作物の安全・生産者の安全・環境の安全を徹底します。

葉いもちの無人ヘリ防除を希望される方は最寄りの営農経済センター又はグリーンショップまでご相談下さい。※集落で面積をまとめた上でご相談下さい。

使用した肥料名及び農薬名と散布量を稲作栽培こよみと栽培管理の記録へこまめに記帳しましょう!